

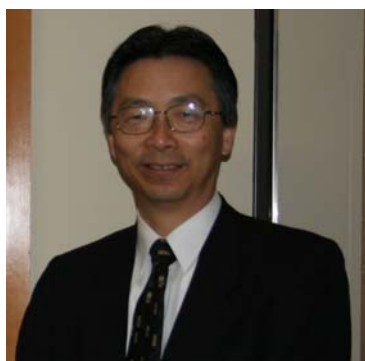
Special Support Education Research Center

SSERC 通信

(第4号 2007年3月)

国立大学法人 筑波大学
 特別支援教育研究センター
 センター長：前川 久男
 〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
 TEL：03-3942-6923/FAX：03-3942-6938
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/sserc/>
 mail：sserc@human.tsukuba.ac.jp

【特別支援教育研究センターの更なる飛躍】 安藤 隆 男



数日來の寒の戻りで、東京キャンパス界隈の桜の蕾もいささか身を縮めて震えているように見えます。

さて、筑波大学特別支援教育研究センターは、平成16(2004)年4月の開設から3年が経過します。この間、センター長は、センター立ち上げにご尽力された斎藤佐和教授から前川久男教授に引き継がれ、さらに附属障害教育学校からの先生方をセンタースタッフに迎え入れることより、研究開発、教員研修、理解啓発の各事業の充実を図ってきたところです。各事業での成果は、様々な媒体により発信するよう努めて参りました。

そのような中、平成19(2007)年4月から筑波大学附属障害教育学校は、特別支援学校となります。これに伴う附属特別支援学校将来構想の検討や、つくば地区における①学群・学類再編による障害科学類の設置、②修士課程教育研究科障害児教育専攻の人間総合科学研究科障害科学専攻前期課程への移行(平成20年度予定)、③心身障害学系を障害科学系へと名称変更、等々の改編を受けて、筑波大学特別支援教育研究センターでは、附属特別支援学校を教育・研究の場として活用する教職大学院の設置(東京キャンパス)を構想しております。これまで教員研修事業として位置づけていた現職教員研修事業を発展させる趣旨から、教職大学院は専ら現職教員を対象としております。

筑波大学特別支援教育研究センターは、事業の一部を移転してスリム化することにより、research centerとして新たな事業展望が求められる段階になったと考えております。学内外との連携協力をさらに密にすることにより、更なる飛躍を遂げたいと願っています。

【報告】

主催セミナーの開催(シリーズ：特別支援教育の最前線)

第5回「特別支援教育のあり方が今後の学校をどう変えるか」—特別支援教育と小学校における学級経営を巡って—

平成18年12月23日(土)に附属小学校講堂において開催された今回のセミナーは、本センターのe-ラーニング事業の一環として八重山養護学校にも同時配信され、学校種を越えて全国から、約200名近くの参加者がありました。第一部は「小学校における特別支援教育の課題」と題して、筑波大学特別支援教育研究センターの藤原義博教授より、第二部は「特別支援教育と小学校における学級経営」と題して、立教大学現代心理学部心理学科助教授の大石幸二氏より、それぞれの講演がありました。後半のシンポジウムでは、川崎市教育委員会指導主事の高橋あつ子氏、横浜市立本郷台小学校副校長の安藤壽子氏、所沢市立上新井小学校教諭の白倉節子氏の3氏からの話題提供を受け、配信先の八重山会場も含めて活発な質疑が交わされました。



平成18年度現職教員研修成果報告会・修了式

平成19年3月8日(木)に、今年度の現職教員研修成果報告会が開催されました。コーディネーター養成型研修プログラムの高尾早苗さん(千葉県立香取養護学校)、永井節子さん(千葉県市川市立養護学校)、小林司さん(秋田県立横手養護学校)、指導法重視型研修プログラムの岩佐美奈子さん(千葉県立袖ヶ浦養護学校)の4名が1年間の研修成果を報告しました。研修テーマは以下の通りです。

「養護学校がセンター的機能を十分発揮し地域に根ざすために」

千葉県立香取養護学校 高尾早苗

「養護学校から小学校の特別な教育的ニーズへの支援の在り方」

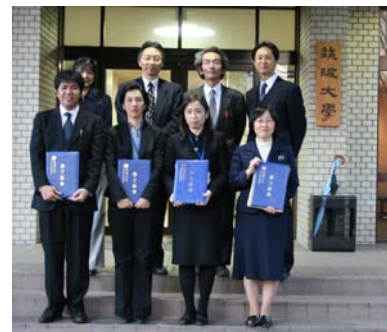
千葉県市川市立養護学校 永井節子

「特別支援教育推進に向けた小学校の校内支援体制に関する調査」

秋田県立横手養護学校 小林 司

「脳性まひ児の認知特性を踏まえた教科指導の在り方」

千葉県立袖ヶ浦養護学校 岩佐美奈子



報告会に引き続いて修了式が行われました。センター長のあいさつ、修了証書授与に続いて、来賓として臨席された谷川教育長から研修生へのねぎらいとはげましのご祝辞をいただきました。

盲学校サポーターブックのご紹介

本校小学部においては、小学校等に在籍する視覚に障害のある児童への支援として、通級による指導を実施していますが、同時に、児童の在籍する学級等に出向き、担任教諭や介助員等と懇談し、視覚障害に対する配慮事項や教材教具の使用法などについてのアドバイスをしています。その際、視覚障害への配慮を踏まえた上で、児童の実態や課題、通常の学校の状況や環境に応じていかに創意工夫をはかるのかを視点としておさえてきました。

今回、今までの相談事項とその事項についてのアドバイスを「サポーターブック」としてまとめ、小学校等での活用を考えました。見えないから、見えづらいから、できない、わからないではなく、どういった工夫や配慮をすることで学校生活がスムーズに送れるのか、物事の理解がすすんでいくのかを考えて作成しました。



具体的な内容としては、

- ・視覚障害について
- ・校内環境の整備に関して
- ・学習環境の整備に関して
- ・教材・教具等の整備に関して
- ・学習内容・方法について
- ・生活面について
- ・行事への参加

についてを記しています。



(問い合わせ先—特別支援教育研究センター雷坂まで)

【寄稿文】 一久里浜養護学校通信への寄稿文—

ごく普通のおつきあい 筑波大学特別支援教育研究センター長 前川久男

昭和44年私は特殊教育を専攻する大学生で、その頃自閉症の子どもの問題がクローズアップされてきた時期でした。私たち学生はどんぐりという名前の子供会を大学のまわりの障害のある子ども達を対象に毎週土曜の午後で開催し始めました。多くの子ども達がまだ就学猶予・免除の対象となっていました。その子ども達の中に一人の自閉症の男の子がいました。彼は旧字体で書かれた読売新聞等漢字を読めるのですが、私たちとのコミュニケーションは困難で、高いところに登り、なかなか一緒に遊べないことに私は悩んでいました。

夏の暑い日で、土が白く乾いていました。なかなか私に振り向いてくれない男の子の後について裏庭を一緒にふらふらしていたのですが、突然男の子が立ち小便をしましたのです。それを見て私はまねをして一緒に立ち小便を始めました。そして乾いた土に絵を描くようにしたのです。すると彼は私を見上げ同じことを始めました。妙な話

を始めましたが、私にとっては自閉症のお子さんとは初めてコミュニケーションがとれたと感じたことなのです。なんとか子どもに振り向いて欲しい、遊びに入ってきて欲しいと思いかかっていたのですが、私の働きかけに反応してくれないのです。その代わりに私が彼のまねをしたことに反応してくれたのです。その後も多くの子どもに出会いましたが、子どもに何かをやらせるのではなく、子どものやっていることをまねすることから関係をとることを学びました。じっと座って何かを見ているのであれば、子どもの横に座り同じものを見る。すると子どもは私の膝に手を伸ばしてきました。鏡の前で体を前後に揺すってれば、同じように子どもに声をかけながら一緒に体を前後に揺すりました。そして私は一時的に体を揺することをやめました。すると子どもも体を揺することをやめました。私はそれを見て、ユラユラといいながら再び体を揺らし始めると、彼も同じように体を揺らし始めたのです。

これを後になって「重度・最重度の障害をもつ子どもの教育」(Stenberg & Adams,1982)という本の中のコミュニケーションの指導という部分で同じことが紹介されていることに気がきました。そこではムーブメントダイアログ(動きによる対話)と呼ばれていて、子どもが他者の動きを予期したり、共鳴するかのように同じ動きを始めるということが述べられおり、それが前言語的なコミュニケーションとなり、最終的に言語やシンボルを用いたコミュニケーションに発展するものだとされていました。

これらのことから私は、コミュニケーションがとれない子どもはいないのではないか。子どもの表出する様々な反応にきちんと対応していけば、子どもは私たちに反応してくれることを学びました。子どもが私たちに反応してくれことを期待するのではなく、子ども達が私たちの反応を期待してくれることを期待することが大切なのではないでしょうか。

赤ちゃんが目の前にいることを考えてみてください。赤ちゃんは多くのことはできません。しかし外界の変化に反応しています。その小さな反応に気づき大人が反応してあげることで、子どもの中にその反応を期待する力を高めていきます。自閉症のあるお子さんの場合も同じだと思います。子どもの反応にしっかり大人が反応してあげることで、ごく普通のおつきあいをすることが大切なのだと思います。

視線が合わない、でも子どもの見ているものを同じように見て感じる。まねができない、でも子どもの動きに合わせて感じる。そこから教育は始まるのではないのでしょうか。

【現職教員研修生、研修日記】

「東京には空がない」とは高村光太郎の智恵子抄だっただと思いますが、私が東京に来て何かしら落ち着かなさを感じていたのは「東京には山がない」ということでした。研修も終わりに近づいた先日、ひよんなことから安藤先生に連れられて筑波山に行ってきました。予定などなかった筑波山だったため、時間の都合で頂上まで行けなかったことが心残りでしたが、ちょっとした心地よいひとときでした。

センターや大学での講義は、経験則に偏りがちな日頃の取り組みに対して指導の根拠を振り返るよい機会になりました。また、大塚養護学校支援部で、幼児の支援に継続的に関わりながら心の動きや変容に触れられたことは貴重な経験でした。たくさんの人に感謝です。

研修で取り組んできたテーマには、まだ宿題が残されています。もうすぐセンターでの1年は過ぎますが、私の研修はもう少し続きそうです。
(秋田県立横手養護学校 小林司)

いろいろなことを研修するぞと期待ばかりの「April」、連休明けからスタートと自分で決めた余裕の「May」、講義に明け暮れ爽りのある「June」、調査項目を考え焦り始めたアンケート「July」、休まずに行った免許法認定講座&レポート提出に追われた「August」、アンケート調査が完成し何度も見直した「September」、アンケートの配布を通して学んだ人間関係「October」、打つても打つても終わらないアンケート集計「November」、クリスマスツリーを横目に見ながらパソコンとお友達「December」、千葉県報告書が完成してこれでいいのか自問自答の「January」、アンケート調査の分析やパワーポイントの作成の仕方を学んだ「February」、発表の連続・緊張感を味わった「March」、これが私の一年でした。先生方、有難うございました。感謝!感謝!感謝です。「こいつ1年間何やってきたんだよ」と言われないように、スタートに着く今の私です。

(千葉県立香取養護学校 高尾早苗)

【支援部の紹介コーナー】 —このコーナーでは、附属障害教育5校の支援部の活動を順に紹介していきます—

◎ 久里浜養護学校 地域支援部です ◎

本校の地域支援部では、本校の子ども達について地域の方々に理解していただき、共に子ども達の育ちを支えていただきたいと思いますと考え、地元横須賀や三浦地区を中心に、様々な活動を展開しています。

ボランティア講座

本校の子ども達とのふれ合いを中心としたボランティア講座を開催しています。様々な活動場面を体験しながら、知識や技能を習得していただいています。

きらきらコンサート

子ども達が生の演奏に触れる機会になるとともに、地域の方々と一緒に鑑賞することで、交流の場となることも大切にしています。今年の7月に開催した「夏のきらきらコンサート」では、国立特殊教育総合研究所有志によるリコーダーの素敵な音色や久里浜高校吹奏楽部の皆さんによる迫力ある演奏をそれぞれ披露していただきました。また12月の「冬のきらきらコンサート」では、地域の方によるマジックショーや、リコーダー等でのクリスマスソングを楽しみました。



授業公開

本校の教育活動の一端を紹介することで、本校の存在・役割及び特殊教育についての理解推進を図ることを目的に実施しています。今年度は7月1日(土)に開催しました。

公開セミナー



本校は平成16年度より知的障害を伴う自閉症の幼児児童の教育に取り組んでいますが、自閉症への関心が高まる中、どのように子ども達の理解を深め、育ちを支えていけばよいのか、という戸惑いもまだまだ少なくありません。そこで自閉症児の発達を踏まえ、就学期および学校卒業後のライフステージを支える立場の方からの提言を聴き、自閉症児への支援を中長期的に考える機会を得ることを目的として企画しています。11月に開催された今年度のセミナーは「自閉症児の地域社会への自立へ向けて～家庭の支援、学校教育のあり方を考える～」をテーマに、神奈川県における自閉症者の現状を支える立場から神奈川県

総合教育センターの立花裕治氏、自閉症者のグループホームを運営される立場から自閉症のお子様のお母様である日本自閉症協会の氏田照子氏、横須賀市内での支援活動を支える立場としてよすか就労援助センターの後藤由起夫氏の3名の講師をお迎えしました。保護者や教育関係者、地域の方々と参加者も幅広く、それぞれの子ども達に合った就労や自立について考えることができました。

地域向けの広報誌について

地域の方々に本校の教育活動を知っていただくために、広報誌「のびのび」を近隣の自治会に戸別配布しています。

自閉症教育啓発ビデオの企画作成

子ども達の学習活動をまとめたビデオを作成しました。機会がありましたら、ぜひご覧ください。

【テレビ会議システムの活用に向けて】

本センターでは現職教員研修プログラムの一部のeラーニングにて展開することを目的に、ネットワーク上での双方向通信によるテレビ会議システムを導入しました。この間、本システムを利用して、現職教員研修生向けの講義や主催セミナーを、沖縄県・鹿児島県・静岡県などの教育センターや養護学校に向けて配信しました。また、本センターの諮問機関である5部門会議をテレビ会議にて開催する実験も行いました。最近では、文部科学省とJICAによる「国際教育協カイニシアティブ」事業の一環として、本システムを通じて海外に派遣されている現職教員をサポートする研究も進めています。平成18年度には、本センターから各障害附属学校に対し、本システムを組み込んだパソコンとカメラなどの周辺機器一式を配布させていただきました。これからは、各障害附属学校からの研修生向けの講義や研究会の配信、各学校間でのケースカンファレンスなどにもご活用いただくことを期待しております。